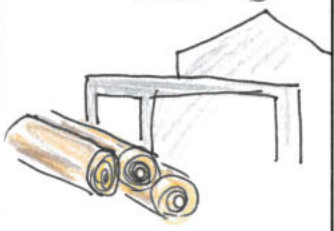
板割り（板へぎ）

木の性質を活かした、知恵と匠の技

19. Dec. 2020
at 児島工務店
島根工場

柿葺屋根に用いる柿板（こけら）を作る作業。柿板は杉やサワラなどの木を割りさいて、薄く均一な厚さに作られたもの。繊維に沿って割られた板は細胞組織が断絶されていないため腐りにくく、凸凹のある板面は、葺き重ねた際に空き間をつくるため、通風・通水に優れ、板は長持ちします。

木の板を用いて屋根を葺く文化は世界各地に見られますが、1分≒3mmもの薄さの板で葺く屋根をつくりあげるのは日本ならではの"匠の技"です。
薄さ均一につくられる優美な曲面をつくる現場の葺き手を支えるのは、葺き材となる「柿板」を作る職人たち。
爽やかな木の香りの立ちこめる工場が、全国の文化財の屋根を支えています

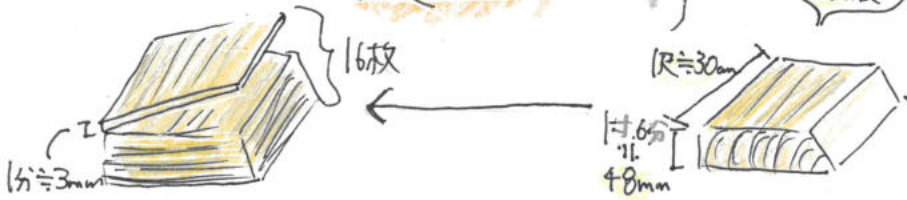


児島工務店
事務児島氏

木材市場に材料が出回るタイミングと揃えに必要な時間、葺き材が必要なタイミングを合わせることは難しい。
木材の購入は投資的に行うため、材料保管のための広いスペースが必要

板割り（板へぎ）はこの工場含めた出雲地方の流派と、信州を拠点とする流派があり、道具の使い方や作業等に違いがある。用語も若干異なる

屋根葺材以外にも化粧軒裏板などに割板（へぎ板）が用いられることもある。
1m以上の長尺で、厚さ5≒1.5mmのものを作ることも。

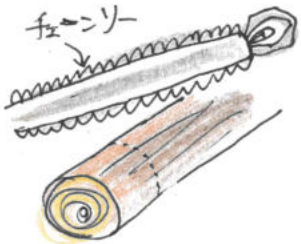


単位 1ゴオリ＝192枚＝8坪分
（半ゴオリ＝96枚＝4坪分）

材質；サワラや杉 他にネズコ、栗なども

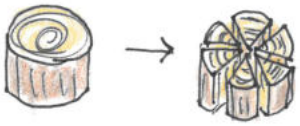
- サワラ…やわらかく加工しやすい
  桶などの材料に用いられている
  建築用材としては不向きなため余材となったことからある一時期屋根材として多用されたとされる。近年は流通が少ない。
- 杉…含水率が大きく加工はサワラより難
  かつては屋根材として一般的であったが、一時期サワラに取って代わられ、近年また数を取り戻しつつある。
  サワラに比べ、クセの強いニオイがする。

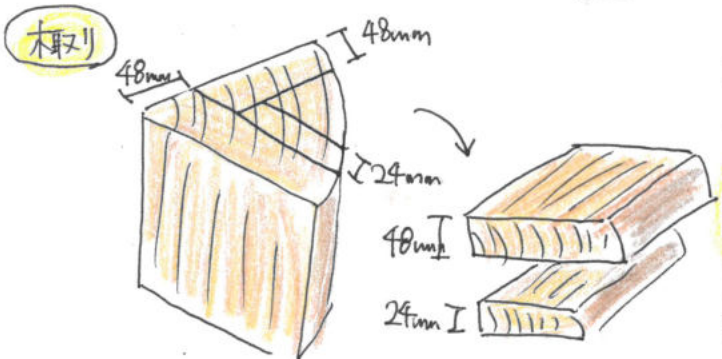
柿葺屋根に使う柿板の作り方



原木から所定の長さ+αに切る（屋根の場合1尺≒30cm+α）

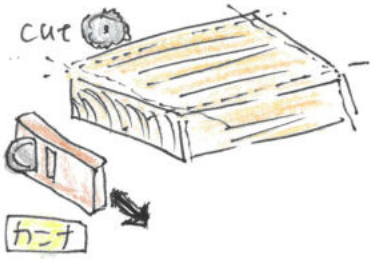
大割包丁（ナタ）でみかん割り（6等分）





板割の素材となる一定の厚さ（1寸6分≒48mm 8分≒24mm）の厚板を割って作る
板の目を見極めながらなるべく余材のないように作る必要がある。熟達した職人が行う重要な仕事

厚板の板などをのり落とし整える
一方の板はカンナがけする



工場内は加工のあまりの木っ端がたくさん。
その木っ端を使って、燃やす薪ストーブなのかけで室内は冬でも快適♪

厚板を割り割いて、薄い板＝柿板をつくる

基本

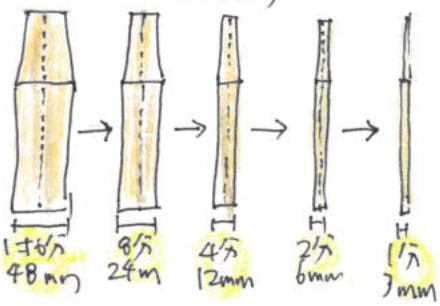
いくつかある溝は深さや幅がそれぞれ、割り方に合わせて使う位置を変える。台のサイズ・形は人それぞれ

① 目検討で厚さ幅の位置に斧をあてる

② 木槌（バンバ）で刃をたたき込み板を割る

③ 刃を押し込む
手で割る力で板を分断する

①〜③を繰り返す



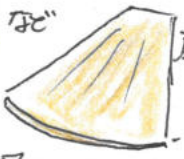
特殊な板

榎萱（せきがや）

板面は割り肌がそのままであることが柿板としての必然性だが、板面の接着箇所にスキ間が出きてしまうと見端が良くない箇所に用いる柿板は、板面をカンナがけする

側面や板面の毛羽立ちを整える

巻萱（まきがや）など



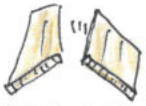
屋根の隅・谷部分用など

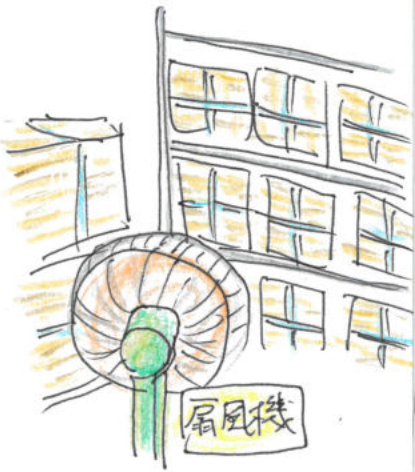
木口面 （木の年輪がナナメ）

ふつうの （まっすぐ）

カーブをつくる板なので少し曲げて使う

ナナメの年輪だと割れずに曲がる



ふつうの板だと割れてしまう。

まとめてしばる
乾燥させてから出荷